

バレーボール部活動継続の阻害要因に関する研究
～中学・高校時代のストレスに注目して～
Research on the Prevention Factor of Continuation in Volleyball Club Activity
～Focusing on Stressor of Junior High and High School Terms～

1K08B174-3 平田結莉
指導員 主査 原田宗彦先生 副査 遠藤俊郎先生

【緒言】

21世紀を向かえ、若年齢層による大きな犯罪や、いじめおよび不登校はなお増加傾向にあり、深刻な社会問題となっている。これらの問題に適切な対応をできるかがこれからの教育に課せられた大きな課題であることから、学校教育の一環である部活動に焦点を当てた中学校卒業生の部活動継続に関する研究（上田・丸山，2004）等がされてきた。

また、近年では国民医療費が増加傾向にあることから医療費抑制を背景に中高年を対象とした運動継続に向けた行動変容ステージに焦点を当てた研究が行われてきた。青年期の運動部活動経験が中高年以降の運動習慣を予想できる（岡田他，2003）ことが明らかにされており、若者にとって競技スキルを習得する主な機会の一つである運動部活動を続けることは意義があり、運動部活動に大きな期待が寄せられているのである。そこで、運動部活動の継続に注目した研究はほとんどないという現状より、ストレスは運動部活動を続けることに対する問題事象と考えられるという研究をもとに中学時代のストレス、サポート自己効力感に注目した大学生の運動部活動に関する回顧調査（安田他，2009）が行われている。このように中学や高校の部活動の継続要因に対する研究はあるものの、大学生の部活動継続要因で体育会とサークルを比較した研究はほとんど行われていない。

そこで本研究では、体育会で運動を継続するにあたっての阻害要因に注目し、体育会に所属する学生とサークルに所属する学生の間にも、大学生の運動部活動に関する回顧調査（安田他，2009）と同じように過去の部活動運動場面における部員のストレスの相違があるのかを明らかにする。さらに、本研究ではバレーボールに着目して研究を行う。9m×9mという球技では一番狭いコートを使用しており、その中に6人または9人という人数が密集していることから人間関係がしっかりと噛み合わなくてはいけないスポーツであり多くのストレスを感じることから研究対象としてバレーボールを選定した。

【研究目的】

バレーボール部活動を、中学時代・高校時代・大学時代と続けるための阻害要因を明らかにし、大学まで部活動を続けられる環境整備のための一資料とすることを目的とする。

【研究方法】

中学時代・高校時代のどちらか一方でもバレーボール部に所属かつ現在関東大学バレーボール女子1部リーグに属する大学（4校）のバレーボール部員101人と、中学時代・高校時代のどちらか一方でもバレーボール部に所属かつ現在バレーボールサークル（8団体）に所属する大学生95人を対象としたアンケート調査を行った。調査項目は渋谷・小泉（1999）が開発した高校運動部員用ストレス尺度を用いた。「指導者」11項目「練習時間」7項目「競技力」10項目「チームメイト」7項目「怪我・病気」5項目の5因子からなる40項目すべてを採用しアンケートを行った。回答方法は、ストレス項目に対してその出来事を経験した頻度とその嫌悪感を4件法で評価するように求めた。ストレス得点は経験頻度と嫌悪感を乗じたものを用いた。高得点者ほどストレスが強いことを示している。

【結論】

中学時代は競技成績が高いと全体のストレスは弱まることから、継続阻害要因を無くすためには、競技成績を残すか、指導者とチームメイトとの良好な関係を築かせ、練習時間や競技力のストレスを弱めることが必要である。高校時代は競技成績の高低に関わらず、指導者やチームメイトとの良好な人間関係を築くことが体育会での継続を促すのである。つまり、高校時代は人間関係に部活動の価値を見出しているのである。

現在、会社やスポーツ団体で組織の人間関係を円滑にするために、アイスブレイキングやチームビルディングを取り入れ始めているが、中学・高校の部活動でもこのような活動を取り入れる必要がある。できるならば高校では技術的なコーチだけではなく人間関係を円滑にするコンサルタントを雇うことが、バレーボールを体育会で続ける阻害要因を無くす効果的な手段であると言える。さらに、中学時代は高校のケアに加えて練習時間や競技力に関するストレスが強いと、バレーボールを体育会で継続する大きな阻害要因になるため、技術的なバックアップはもちろん、練習を退屈にさせない努力が必要であるという結論に至った。